

## 2014 年度後期 授業評価アンケート結果に対するコメント

### —経済学部—

経済学部長 杉 本 義 行

今回、経済学部開設科目（法学関連科目を除く）で後期開講科目のうち、実施が任意であるゼミ・演習、受講者 10 名未満の科目をふくめて 234 科目についてアンケートが実施され、延べ 6,906 名の経済学部生のみなさんからご協力をいただきました。より詳細には、実施必須の 192 科目に対して、188 科目が実施され、実施率は 97.9%と高く、また、実施が任意であるゼミ・演習、受講者 10 名未満の 112 科目のうち、46 科目でアンケートが実施されました。この場を借りて、アンケートに回答していただいた学生のみなさんと貴重な授業時間を割いてご協力頂いた経済学部専任・非常勤の先生方に深く感謝いたします。

ご承知のように、個別科目の集計結果は Campus Square から自由に閲覧することが可能です。是非、積極的に活用していただきたいと思います。

まず、授業の満足度を示す「総合評価」の学部平均は、5 段階評価で 4.15（昨年度 4.18）と昨年度とほぼ同様でした。個別科目でみると、4.5 以上の高い評価の科目も散見され、概ね良好であったと思われませんが、この学部全体の「総合評価」の値を他学部等と比較すると、ダントツに高い文芸学部 4.46 は別としても、大学全体の 4.30、法学部 4.30、社会イノベーション学部 4.27、共通教育 4.29 であり、4 学部等の中で最低となっていて、見劣りがする結果となっています。これは昨年も同様の傾向でした。個々の項目をみると、「教員の話し方は明瞭であった」（3.96）、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」（3.81）、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」（3.79）、等が他の項目のスコアに比べて低く、授業の内容、やり方等に改善の余地がまだまだあることを示唆しています。

設問ごとの結果と「総合評価」との相関係数をみると、これまで相関係数が一番高かった「当該分野への関心と学力が得られた」という項目は、0.62（昨年度 0.79）と第 6 位となり、それにかわって「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」が 0.69 と第 1 位となりました。双方向のいわゆるアクティブラーニングを取り入れた授業形式が満足度を高めることを示唆する結果となっています。ついで昨年度同様に「授業への教員の熱意を感じた」（0.66）が第 2 位、さらに「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」（0.65）、「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた」（0.64）、「教員は授業時間を有効に利用した」（0.64）、が重要なファクターであることが示唆されています。

今回は、＜授業の内容の面白さ＞と満足度の関係が少し後退した印象を受けますが、＜どれだけ理解できるか＞という点が、これまで同様に、学生のみなさんの評価ポイントではないかと思えます。したがって、理解度に影響を与える様々な要因たとえば教員の熱意や静謐な学習環境、授業内容のレベル、教員と学生が双方向でコミュニケーションすることによる深い学習（Deep Learning）が評価項目として重要視されているのだと私は考えます。

指摘された点を真摯に受け止め、組織として授業の一層の質向上につとめたいと考えます。